

平成20年度事業報告

財団法人 滋賀県陶芸の森

1 事業概要

滋賀県の伝統文化にして重要な産業である信楽焼をベースに、個性にあふれ、なごめる地域づくりの拠点を目指し、自然の中で創造と遊び、文化と産業が一体となった多様な機能をもつ公園として、また、陶芸館や創作研修館、産業展示館の三つの施設の運営を通じて県民の陶芸に対する理解と親しみを深め、広く陶芸に関する交流の場として、積極的な事業の展開を図り、陶器産業の振興と陶芸文化の向上に寄与している。

指定管理者として3年目となる平成20年度は、①県民に親しまれる施設運営に関する事業、②文化の向上と交流に資する事業、③産業の振興に関する事業の三つを柱に、5年間の目標達成に向け、小学生から高齢者まで多くの人が陶芸を体感できる企画を推進し、併せて効率的、効果的な施設運営に努めた。

2 事業実績

(1) 県民に親しまれる施設運営に関する事業

太陽の広場や星の広場など人々が自由に憩い楽しめるよう公園や施設を安全かつ清潔に保ち、芝と植栽の管理に努め、入園者に快適な空間とサービスを提供した。

(2) 文化の向上と交流に資する事業

魅力ある展覧会の開催や創作事業を展開することにより滋賀から世界へ陶芸文化を発信し、所蔵品や陶芸の森が持つネットワークを活用して子どもを対象にした普及事業を拡充することにより陶芸ファンを育成した。

ア 展覧会開催事業

(ア) 「近江の商家とくらしとやきもの」新名神高速道路開通記念

平成20年4月1日(火)～6月29日(日) (入館者数12,935人) 80日間 (平成19年度からの継続事業)

「三方よし」の精神のもと湖国を拠点に独自の商人文化を築いた近江商人が用いたもてなしのうつわやたしなみの道具、心癒した愛蔵品、商いの品など、近江の商家のくらしに幅広くいきづいてきた陶磁器を紹介し、「やきもの文化」と「商人文化」の接点を探った。展示数 129 点

(イ) 「世界に誇る和製テーブルウェア—オールドノリタケと懐かしの洋食器」

平成20年7月6日(日)～9月15日(月) (入館者数10,141人) 62日間

江戸時代末期から昭和前期までの時代背景を反映する日本国内向け洋食器やオールドノリタケなどの海外向けに輸出された洋食器のデザインを通じて、日本が歩んだ近代化の道程を探った。展示数 238 点

(ウ) 「やきもの動物パラダイス」と「滋賀のやきもの」

平成20年9月21日(日)～平成21年3月31日(火) (平成21年度継続事業) (入館者数15,935人) 95日間

冬季休館：平成20年12月22日(月)～平成21年3月13日(金)

収蔵品を中心に二つのテーマからなる展覧会を同時開催した。「やきもの動物パラダイス」では、アジアや南アメリカおよび国内の形象土器から現代作家たちの動物作品の数々を人と動物とのかかわりを通して紹介した。「滋賀のやきもの」では、歴史の中で培われた滋賀のやきものを紹介した。展示数120点

(エ) 「魅せられる…今、注目される日本の陶芸」

平成20年4月1日(火)～5月11日(日) (平成19年度からの継続事業) 東京ニューオータニ美術館において巡回展示 (入館者数2,174人) 36日間 展示数85点

平成20年6月7日(土)～7月21日(月) 静岡アートギャラリーにおいて巡回展示

(入館者数2,863人) 39日間

平成21年3月13日(金)～3月31日(火) フランス国立セーブル陶磁器美術館において巡回展示

(入館者数3,358人) 16日間

イ 創作事業

国内外から研修生を受け入れ、著名な陶芸家を講師に、感性と技術の交流を通して陶芸家の育成に努めるとともに、ゲスト・アーティストによる講演会、ワークショップ等を行い産地振興に努めた。また、中国で

開催された国際陶芸アカデミー総会や、台湾の国立台南大学、国際交流基金主催のタイの現地調査などに職員が招待され、日本のやきものの実情や陶芸の森の取組について紹介を行った。

- (ア) スタジオ・アーティスト 受入者数18人 (日本6人、海外12人)
- (イ) 短期スタジオ・アーティスト 受入者数22人 (日本6人、海外16人)
- (ウ) ゲスト・アーティスト 受入者数8人 (日本6人、海外2人)
- (エ) 講演会、ワークショップの開催 11回 参加者数297人
- (オ) アーティスト・イン・レジデンス展の開催 9人 実施回数8回 129日間
- (カ) イアンターシップの受入 受入者数2人 (海外2人)
- (キ) 国内外の若手陶芸家への支援 支援対象者1名 (海外1人)

ウ 情報収集発信事業

陶芸を通じて人・もの・情報の交流により陶芸文化の普及啓発を図り、国内外の情報を収集し、ホームページや機関誌「レビュー」等による国内外への情報発信に努めた。

エ 子どもやきもの交流事業

将来にわたる陶芸ファンの獲得を目指し、世界にひとつの宝物づくり実行委員会と連携して、陶芸の森の特性を生かしたやきものに関する鑑賞教育や体験教育の場を提供した。

- (ア) 本物と出会うー総合的学習プログラム (実施回数52回、参加者数 4,094人)

学校の総合的な学習の時間における授業の一環として、地元陶芸家などが学校に出向き、子どもたちに本物の陶芸に触れる機会を提供した。

- (イ) 陶芸の森来園プログラム (実施回数10回、参加者数 734人)

展覧会や野外設置作品の鑑賞のほか、陶芸家との対話や制作現場の見学、陶芸の森の穴窯や登り窯の見学など、信楽焼の伝統や進化し続ける現代陶芸を体感できる機会を提供した。

- (ウ) 夏季研修会ー教育関係者を対象とした美術館普及事業 (実施回数1回、参加者数 51人)

学校教育や社会教育、美術館・博物館に携わる関係者を対象に、陶芸や美術が子どもの健全な成長に果たす役割について、実際に本物に触れるなど、実践を通して考える機会を提供した。

- (エ) 地域子ども教室推進事業 森・もり！やきもの大作戦 ねんどと遊ぶ

(実施回数7回、参加者数 201人)

信楽陶芸作家協会のメンバーが講師となり、休日に来園した親子が気軽に楽しく参加できる事業を展開した。

- (オ) 世界にひとつの宝物づくり事業 (実施回数44回、参加者数 1,755人)

世界にひとつの宝物づくり実行委員会に参画し、地元の陶芸家やボランティアと連携して、子どもや障害者に「土」という素材を用いてものを作ることの喜びや感動を体感できる創作体験プログラムを提供した。

(3) 産業の振興に関する事業

信楽焼の伝統技術を紹介するとともに、信楽焼のデザイン活性化を図るため、海外のデザイナーを招聘し、信楽焼の産業振興を目的とした事業を展開した。

ア 信楽焼の伝統と可能性を探る

日本工芸会近畿支部陶芸部、財団法人秀明文化財団との共催で「信楽焼原点の美」再現・金山窯焼成研究会」を短期研修事業として開催し、信楽からは、滋賀県無形文化財の高橋春齋氏、信楽焼伝統工芸士の小谷光二氏を招聘し、日本工芸会近畿支部会員と信楽の伝統を追求する陶芸家約80人を対象に信楽の伝統技術を学ぶ機会を提供した。

イ デザイン活性化事業

信楽焼のデザイン活性化を図るため、平成19年度に地元企業と共同で発足させたフィンランド・デザイン研究会において、陶器デザインの先進国であるフィンランドの若手プロダクト・デザイナーのターニャ・シュピラ氏を招聘し、ユニークなデザインのテーブル・ウェアの試作などに取り組んだ。

ウ 登り窯焼成事業 (実施回数 回、参加者数 人)

信楽陶器工業協同組合青年部を主な対象として、信楽焼の伝統的な登り窯で釉薬を使ったやきものの焼成

技術を学ぶ場を提供した。

エ しがらき学ノススメ（実施回数 26回、参加者数 499人）

信楽焼に対する理解を深めることを目的に「穴窯体験講座」を含めて、やきものの各種技法の講座を開催した。

オ セラミック・アート・マーケットの開催

平成20年10月11日（土）～10月13日（月）（入園者数21,000人）3日間

県内各地で活躍する陶芸家の個性豊かな陶芸作品を、広く県内外の人々に紹介するとともに、陶芸に関する交流の場を提供した。

(4) 自主事業

ミュージアムショップの運営

展覧会図録や関連グッズ、陶芸関係書籍を販売するとともにインターネットを活用し販売の促進に努めた。

販売数 7,608品